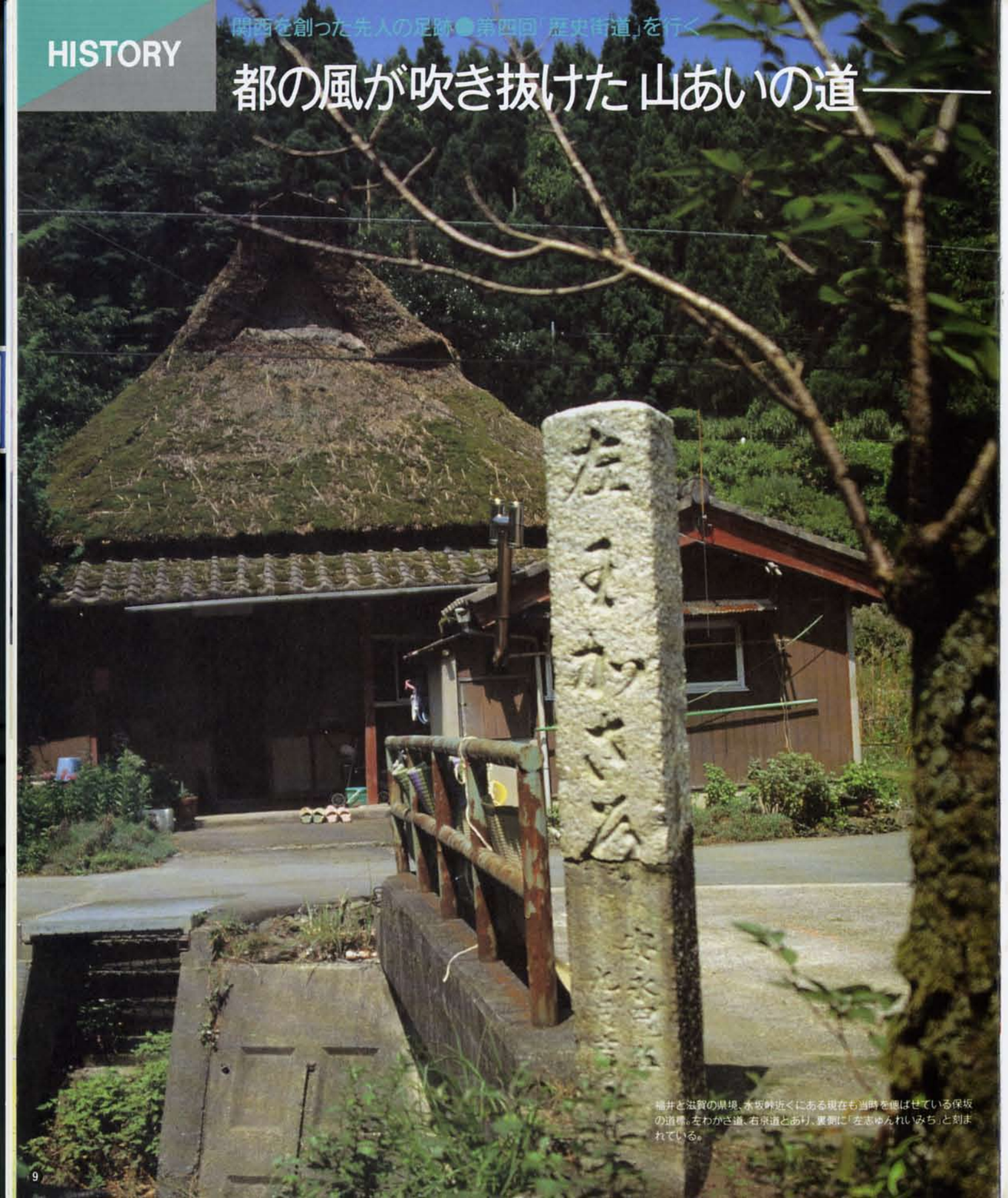
都の風が吹き抜けた山あいの道——

若狭街道

鯖街道とも呼ばれたこの京〜若狭間最短ルートは政治・経済のかくれバイパスだった。



福井と滋賀の県境、水坂峠近くにある現在も当時を偲ばせている保坂の道標。左わがさ道、右京道とあり、裏側に「左志ゆんれいみち」と刻まれている。

■京の食文化をささえた若狭の鯖

焼く、煮る、3枚におろして寿司にする、アラは大根と煮る—このように都人の食膳でバラエティショーのスターを演じたのが、「日本一」と美食家・北大路魯山人もほめたたえた若狭小浜の鯖でした。夜明け前に小浜の港を出発した産地直送フレッシュ便は、峠を越え谷を走り、ひたすら最短コースをとりながら、夕方には終着駅、京都出町柳に着いたともいいます。この山越最短コースが、鯖街道ともよばれ親しまれた「若狭街道」です。

琵琶湖西岸を南北に走る西近江路が表街道なら、比良・比叡山地西側を通る若狭街道は裏街道。しかし、平安中期にはすでに存在したというこの街道は、バイパス的なすばやさでもって物資を都に届け、都の文化を北上させる経済・文化交流の要路であり、同時に、葛川明王院の参詣道、そして西国33札所の巡礼道としても多くの人が行き来した宗教の道でもあったのです。

■信長の上洛で戦略上の要路にヘンシン

庶民の経済・文化・宗教活動をささえてきた若狭街道が、政治的な色あいを強めてきたのは中世末期、戦国時代のころです。西近江路の間道として役割が強調されたこの時期、若狭街道は歴史の裏舞台となっておおいに活躍することになります。騒乱が続く都から足利将軍をはじめ多くの人々が疎開してきましたが、街道沿いの町は、彼らの格好のかくれ里でもありました。

そして信長が京都に入ってくると、京都の北の外港である小浜へ最短ルートでつながり、しかも安土〜京都間の連絡道に利用された若狭街道は、戦略上の要路として一層重視されるようになりました。信長が朝倉・浅井にはさみ打ちされそうになって、越前から京へ逃げ帰ってくるのに使ったのもこの街道でした。

■現代の土木技術で大きく変貌した若狭街道

途中峠・花折峠・水坂峠の3つの大きな峠のなかで、街道きっての難所といわれたのが花折峠です。標高591mの曲がりくねり、しかも片側は断崖という険しさで、そのため近年まで交通を大きく制約してきました。

この花折峠には、日本でも有数の活断層・花折断層が走っていて"途中村落"から花折峠を経て、北方の"平村落"へ続き、直線状の谷に沿って延びていて、その巾は、100m〜300mと推定されています。

昭和50年6月、滋賀県のトンネル技術者がこの活断層に初めて挑み、破砕帯と湧水に苦しみながら、峠の中腹を抜ける全長727m、巾員7.5mの花折トンネルを開通させました。同じ年、若狭街道は、国道367号に昇格し、旧街道と重複するような形で新装を整えました。

今や、トラックやマイカーが猛スピードで通過するだけになった街道沿いの町々は、この時代の流れのなかで、新しい方向を摸索し始めています。このキーポイントになるのが豊かな自然とともに歩んできた歴史の遺産といえるでしょう。

花折トンネル

■いまやシティ感覚の山里、大原の里

かつて京へ入る道は7本あり、京の七口と呼ばれていました。その1つ、大原口(今の寺町今出川)が若狭街道への出発点です。ここから北上して、先人の足跡と歴史遺産をかいまみてみましょう。

大原口を出て、カマ風呂で有名な八瀬を過ぎると、やがて大原の里に入ります。春、秋ともなると観光客がドッとくり出し、三千院、寂光院あたりはシティなみの賑わいをみせますが、平清盛の娘、建礼門院徳子が世を捨て寂光院に閑居したころは「野寺の鐘の入相の音すごく、…鹿の音かすかに音信て虫の恨みも絶え絶えなり…」という侘しく心細い山里でした。この徳子の出家以来、寂光院は尼寺として今日に至ることになります。なお、京の風物詩として親しまれたタキギ売りの大原女は、徳子の侍女たちの柴刈り装束を里人がまねたのが起源だといわれます。昭和の初めごろまで大原女たちは若狭街道を京まで盛んに往来したものですが、今では観光客相手の店員さんのスタイルにその名残りをとどめるだけになりました。

街道沿いの史跡の郷にねむる 秘めやかなヒストリー

平安中期から江戸初期 いくたびも通過していった歴史の影がいまに漂う郷。

■源氏一族が帰還した地、途中町

大原を過ぎて北上を続けると、街道は途中町の中心部で、西近江路へ通じる道とT字型にドッキングします。源氏ゆかりの地、還来(もどろき)神社へは、ここで西近江路への道に折れます。源義朝が平清盛に敗れて東国に落ちのびるときにたどったのがこのルートで、義朝は社前に白羽の矢を棒げて武運を祈ったといわれます。その後、源氏再興の悲願を果たした息子頼朝によって、神田が神社に寄進されました。「もどろき」の社名は、この源氏一族の帰還に由来すると伝えられます。

途中町の地名は、葛川明王院と本寺である比叡山の中間地点に位置することによるもので、途中の集落の高台にある勝華寺(しょうげじ)は、明王院への中継点になっていました。休憩の間、お供えの花をつけておくために、鎌倉時代に作られたという巨大な水船が今もお堂の前に残されています。

■日野富子もお参りしていた葛川明王院(かつらがわみょうおういん)

坊村葛川明王院へ入る行者たちが、お供えの花(榊(さか))をこの峠で手折って持参したことから命名された花折峠(花折トンネル)を越えると、明王院のある明王谷・坊村に着きます。葛川明王院の開祖は近江の僧、相応和尚。彼は比叡山に無動寺を開き「回峰行」の行法を大成したのち、さらに奥比良の滝に参籠して求道すること3年、ついに不動明王を感得し、霊木に明王を刻みました。その像を安置するために建立したのが、修験道場・葛川明王院の起源です。この相応の不思義な宗教体験を再現し今に伝える行事が葛川太鼓まわしで、毎年7月18日夜に行われています。

平安末期には人々の不動明王に対する信仰心はすでに非常に厚く、霊験を頼ってやってくる人々で若狭街道は賑わいました。室町幕府三代将軍足利義満をはじめ、日本一の悪女といわれる日野富子も息子義尚と共に参籠しています。明王院と谷をはさんで建っているのは地主神社ですが、本殿・幣殿・拝殿が一直線に並ぶめずらしい形態をとっています。そして拝殿だけは新しいものですが、本殿・幣殿は細密な彫刻をもつ室町時代の貴重な建造物です。

坊村三ノ滝

日野富子:将軍足利義政の妻、貨殖にふけり、当時、細川、山名氏二大勢力の対立をあおり、応仁文明の乱の因をつくるなど、政治に口を入れ専横をきわめた。

■12代将軍足利義晴のかくれ郷・朽木谷

葛川谷を後にすると、比良山地と丹羽山地にはさまれた朽木谷に入ってきます。朽木谷は古くから街道の宿場町として栄えていた地で、鎌倉時代に近江佐々木氏の流れをくむ佐々木信綱が地頭職として入ってきたのを機会に、歴史上に登場してきます。その後朽木氏が代々継承することになりますが、朽木氏の菩提寺・興聖寺(こうしょうじ)は曹洞宗の開祖・道元の勧めで建てられたものであり、その境内の一隅には、国の史跡名勝の指定を受けている旧秀隣院庭園があります。この庭園は、京の騒乱をのがれて朽木氏を頼ってきた12代将軍足利義晴をもてなすために作られたもので、義晴はこの地に3年間滞留したということです。若狭街道は、ここから九里半峠を越えて終点小浜へと向かいます。

いつ、だれが開いたともわからないこの街道は、平安時代から経済・文化・宗教の道として、あるいは政略上の道として多くの人々の生活やドラマを生み出してきました。昭和50年代、国道367号にとってかわられた時、その役目を終えましたが、今再び、先人の残した豊かな歴史遺産を生かしてよみがえろうとしています。

花折峠石碑

小浜湾

葛川明王院